

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19320118

研究課題名（和文） 近代化過程における宗教の再活性化の比較的研究

研究課題名（英文） Comparative Studies on Religious Reactivation in Modernization Process

研究代表者

竹中 亨（TAKENAKA TORU）

大阪大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：90163427

研究代表者の専門分野：西洋史学

科研費の分科・細目：史学（西洋史）3104

キーワード：近代化、世俗化、宗教再活性化

1. 研究計画の概要

一般的な通念によれば、近代化過程においては、社会の合理化・世俗化が進展するため、宗教は衰退する傾向にあるとされる。しかし、歴史の実例からすると、逆に宗教がそれまでとは形を変えつつも、新たなエネルギーを得て活性化する事態が観察される。最近の世界における諸宗教の急進派の存在は、その公的な例である。

そこで本研究では、近代化と宗教的エネルギーはいかなる関係に立ち、また宗教の再活性化はどのような社会的要因に左右されるかを、種々の時代と国・地域に事例を求めて比較史的な観点から解明するものである。

2. 研究の進捗状況

各分担者はこれまで、それぞれの担当範囲となる時代と国・地域に関して、共通のテーマ設定に即した課題を対象に据えて、実証的な解明作業に携わっている。

研究方法としては、テーマを例証するような具体的なケース・スタディを取りあげ、その実態解明を進めるなかで、全体的なテーマとの関連（例証、修正、補足など）を追求するという方法をとっている。たとえば、アメリカの例で言えば、19世紀末の「社会福音主義者」と「原理主義者」を取りあげて、それがナショナリズム、世界大戦、アメリカ社会での工業化、移民の到来などと関連づけることに努めている。さらに、フランスの事例では、初期社会主義運動に見られる宗教的要素に注目して、それが運動の中でどのような一を占めたかを解明しつつ、宗教的情熱がもった社会改革的な実践的意義に照明をあてようとしている。

また、19世紀ロシアについては、ロシア正教会がロシア社会の近代化、あるいはロシアをとりまく国際情勢に対応した姿勢をとったことが指摘されており、国内情勢に宗教的要素が大きく反映していることについて、解明が進められている。また、ナショナリズムがいかんにして、またどの程度宗教的エネルギーを基盤としていたかについて、興味深い知見が得られている。

ドイツについては、カトリック教会における再活性化に注意を払う一方で、他方で種々の生活領域における改良運動に焦点をあてるという研究戦略をとっている。これによって、既成宗教という枠にとらわれずに、宗教的エネルギーをその種々の表出形態において把握する試みが続けられているわけである。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

（理由）

代表者が提起した図式が一定程度の修正を施せば、関係の時代と国・地域に適用可能であることがおおむね確認された。また、個々のケースについて実証的な解明が著しく進んだ。

4. 今後の研究の推進方策

これまでの研究戦略で成果が順調にあがっているので、引き続きこの戦略に沿って研究の進展をはかる。同時に、来年度は計画最終年度にあたるので、研究成果のとりまとめと研究報告書執筆に向けても、努力を払う必要がある。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

- ① 川本真浩「20世紀初頭イングランドのパジェント・ブームと宗教—近代イギリスにおける地域イベントに関する一考察」『高知大学学術研究報告』58、2009年3月 査読無
- ② 中野耕太郎「『アメリカ史』叙述のグローバル化」『パブリック・ヒストリー』6、2009年3月、16~29頁 査読無
- ③ 長井伸仁「歴史研究と記憶—西洋史学の立場から」『フランス哲学・思想研究』13、2008年12月、39~47頁 査読有
- ④ 竹中亨「明治のワーグナー・ブーム」『大阪大学大学院文学研究科紀要』48、2008年3月、33~65頁 査読無
- ⑤ 山口輝臣「竹岡勝也の肖像」(下)、『史淵』145、2008年3月、31~88頁 査読無

[学会発表] (計7件)

- ① 中野耕太郎「人種暴動とその後—シカゴ人種関係委員会(1919~1921年)の秩序形成」日本西洋史学会小シンポジウムIII、2009年6月14日、専修大学
- ② Toru Takenaka, *Deutsche Softpower in Ostasian. Eine Skizze am Beispiel Japans*, 第2回東アジアドイツ史会議、2008年11月21日、大阪国際会議場
- ③ 山口輝臣「コメント：信仰における他者—異宗教・異宗派の受容と排除の比較史論」、史学会シンポジウム、2008年11月8日、東京大学
- ④ 長井伸仁「19世紀後半のパリにおけるカトリック教会と入移民—地方出身者を中心に」関学西洋史研究会・第10回年次大会、2007年11月18日、関西学院大学

[図書] (計9件)

- ① 山口輝臣 (共著)『近代日本の仏教者—アジア体験と思想の変容』小川原正道編、慶応義塾大学出版会、2010年3月予定、432頁
- ② Toru Takenaka (coauthor), *Japan and Germany: Two Latecomers to the World Stage, 1890-1945*, vol.1, ed. by A. Kudo et al., Folkstone 2009 (pp.114-149)
- ③ 中野耕太郎 (共著)『アメリカ史研究入門』有賀夏紀他編、山川出版社、2009年(担当：88~112頁)
- ④ 山口輝臣 (共著)『境界のアイデンティティ』九州史学研究会編、2008年12月

(担当：319~347頁)

- ⑤ 長井伸仁『歴史がつくった偉人たち—近代フランスとパンテオン—』山川出版社、2007年、191頁